

第25回平和祈念コンサート 講演会

【ちばてつや氏】 皆さん、こんにちは。ちばてつやです。

私は、この練馬に住んでもう60年近くなります。その前は東京の下町で少年時代を過ごしたのですけれども、漫画を描く仕事をするようになってから、どこに住もうかなと思って迷っていたのです。その時、担当だった編集の人が「練馬の富士見台の近くに、安い建て売りがあるから」と言って探してくれたのです。300万円で、2階建てでした。

仕事が少し忙しかったので、探す時間がなく、編集さんの言いなりに。そこで310万円と言ったけれども、10万円まけてとお願いして、そこで、講談社の編集部に頼んで、お金を借りて、そこに住むことになったのです。一時、少し忙しい間だけ、ここで住むのかなと思ったのですが、どうも60年も経ってこのトシになると、もう、終の住みかになりそうです。

なぜ、その富士見台を選んだのかなと思って、色々と聞いてみたら、近くにてづかおさむ手塚治虫さんだとか、馬場のぼるさんだとか、しらとさんべい白土三平さんだとか、練馬には沢山の漫画家が住んでいたのです。

自分も「ひばりが丘」に住んでいて、しかも、この西武線の沿線には、沢山の漫画家がいたものだから、編集さんも入社するついでに、手塚さんや、馬場さんのところへ寄って、ついでに私の原稿をもらってから入社できるということで決めたようです。

昔は、周りは田んぼとか、キャベツや大根の畑ばかりで、夏は雨ガエルやウシガエルが、「ウー、ウー」「ケロケロ」と鳴いて、にぎやかだったのです。

それから、西武線から西武線沿線の北側ですけれども、昔は2メートルから

3メートルの土手があって、その上に線路があって、そこを電車が走っていたものですから、電話で編集の人と打ち合わせをしているときに、電車が通ると100メートル以上離れているのに「ちょっと待って、今、電車が通るから、声が聞こえないから」としばらく待ってもらったほどだったのです。

それぐらい広くて、自然が沢山あるところだったのですけれども、今は色々な建物が建って、マンションが建ったりして、すごく賑やかになりました。だけど、都心に比べると、まだまだ沢山自然があるので、とてもいいところだなと私は思っています。

私は中国からの引揚者なのですけれども、生まれたのは日本です。築地の^{せいるか}聖路加病院という、104歳か5歳まで長生きされた^{ひのはらしげあき}日野原重明先生がいらっしやったところですよ。

お袋のおなかが大きくなったので聖路加病院に行ったら、ベッドが一杯だったので、看護師さんの休憩所のところに入って、そこで休んでいるうちに産まれたと聞きました。79年前です。

79年前に終戦の日が来ました。築地で産まれたのですけれども、その後、産まれてすぐ、親父とお袋の仕事の関係で中国に行きました。

皆さんは「主婦の友」という雑誌があるのをご存じでしょうか。

「主婦の友」という雑誌社に親父とお袋は勤めていたのです。

その社内結婚で、もしかしたらできちゃった婚かもしれないのですけれども、戦争がそろそろ始まる危うい時だったのでしょね。雑誌も新聞社もラジオも、いろいろな表現が規制されるようになってきました。

それで、あれを書いてはだめとか、こういう記事を書いてはだめ、こういう写真を載せたらだめ、国民の国家高揚がくじけるからだめとか、いろいろと制限

されて、表現の自由をどんどん、どんどん奪われていって、それで、親父も、お袋も出版社で働くのが辛くなったみたいです。それでやめてしまって、印刷会社に勤めることになりました。

そういうことで、中国の大陸へ渡ったわけですね。私はまだ産まれたばかりだから、渡った記憶は全然ないです。だから、物心ついたときには、周りに中国人がいる大きな印刷工場にいました。

私がいたところは、北京より、もう少し東北にある^{しんよう}瀋陽というところですよ。昔は^{ほうてん}奉天と言いました。

奉天市の鉄西区というところに工場地帯が沢山あって、そこに印刷工場がありました。私は産まれたばかりでそちらへ行ったのですけれども、その後、5年の間に弟が3人産まれました。

向こうは、3メートルぐらいあるレンガの塀がずっと周りを囲んでいて、中には、工場と事務所とレンガでつくった社宅がありました。

そこで私たちは育ったのですけれども、レンガの塀の中では、中国や朝鮮の人たちも大勢働いていました。でも社宅に住んでいるのは日本人ばかりで、ほとんど日本語で過ごしましたので、私は、いまだに中国語をほとんど話せません。

日本の銭湯みたいな大きな広いお風呂屋さんもありました。いろいろな日用雑貨品も全部そこで買えましたが、学校だけは外でした。

塀の中は、それはそれは退屈で退屈で仕方がないのですが、お祭りがあつたりすると、爆竹が鳴ったりして、塀の外がすごく賑やかになります。

あと、朝、晩に市場が立ったりすることもありました。市場では、饅頭とか焼肉、それから、餃子とか、そういうものが露店で売っていて、それで、その匂いが漂って来るのです。

その匂いがすると、私はたまらなくなって外へ行きたがるのですけれども、私は地理音痴で、外へ行ったら、すぐ迷子になるので「外へ出てはだめ」といつも言われていたのです。だけど外で遊びたくて仕方がないのです。

なので、工場の隅に積んであった石炭をよじ登って塀を乗り越えて、ときどき外に抜け出していました。昔は、燃料が全部石炭だったので、工場の隅には石炭が山のように積んであったのです。

一旦、外に出てしまうと中へ入れないのですけれども、そんなことは考えないから、ただただ外に出たい一心で抜け出して、それで迷子になって、おまわりさんに連れてこられたりしていました。住所と名前を言うと連れてきてくれるのです。

ということを繰り返してきたのですけれども、外へ行くと市場から、とても美味しそうな匂いがするし、それから、日本人の子どもがうろうろしていると、中国の人が「この子がまた来たよ」と言って、ピーナッツを少しくれたりして、それがまたすごく楽しくて、うれしくて。

小鳥屋のおじさんや、そういう食べ物を売っているおじさんと、仲良くなって楽しかったです。

ところが、私が5歳になって、しばらくしたころから、だんだんおじさん達が優しくなくなってきたのです。

昔は「五国共和」と言って、日本と中国とモンゴルとか、朝鮮民族とか、そういう人たち五国、五つの民族がみんなの一つの国をつくろうというのがありました。日本が言い出したことなのですけれども、五国共和、みんなで仲よくやりましょうねと、奉天というところは、そういうところでした。

だから日本の兵隊も、それから中国の兵隊さんもうろうろしている時代でしたけれども、日本の兵隊が来ると、みんな、最初は、わっとよけたのです。それが、

だんだん、だんだんと、よけなくなってきました。

あるとき、私が市場で放浪していたら、日本の兵隊さんが、ダッ、ダッ、ダッと歩いて来ました。すると、今までは道を開けたりしていたのに、市場の人たちがよけないのです。うっかりすると肩がぶつかるような。

私は5歳でしたが、変だなと思ったのです。そういうことを感じました。

それから、今までピーナッツや何かをくれていたおじさんが、くれかけるのだけれども、ほかの人たちの目を見て止めるようになったのです。「商売の邪魔だ、あっち行きな」と言うようになったのです。

なぜ、そんなに冷たくなったのかなと思ったのですけれども、私には分かりませんでした。

3月10日に毎年、東京大空襲の慰霊祭というのがあります。

海老名^{えびな}香葉子^{かよこ}さんをご存じですか。林家三平師匠の奥さんだった人で、今、八十何歳ですけれども、とてもお元気です。

あの人は3月10日まで家族がたくさんいたのです。

浅草の近くに住んでいたのですけれども、3月9日の夜中に東京大空襲がありまして、一晩に10万人が亡くなりました。

そのときに、海老名香葉子さんは、静岡の方に学童疎開していたから助かったのですけれども、ご家族の、おじいちゃんも、おばあちゃんも、お父さんも、お母さんも、それからお兄ちゃん、お姉ちゃん、それからお手伝いさんも、家族が全部、焼け死んでしまったのでしょ、いまだに行方不明のままです。骨も遺品も残っていません。

東京だけでなく、大阪も名古屋も、九州も、いろいろなところが空襲を受け、それで、広島、長崎に原爆が落とされました。原爆とは言いませんでした。ただ

の新型科学爆弾みたいなものが落とされたいと言われていました。

ですから、1日で何万人が亡くなったとか、何十万人が亡くなったとか、そういうニュースを朝鮮や韓国、中国の人たちが知ったのでしょよね。そろそろ日本は負ける、日本はいよいよ危ないらしいぞと。

日本人は、それまで中国で、威張っていたんでしょよね。私みたいなチビは、結構かわいがられていたのですけれども、だんだん、だんだん、「なんだこいつら偉そうな顔して、いずれ負けるぞ」というような気配が出てきたのでしょよね。

だから、兵隊さんが来たときに、今までサーッとよけていたのに、よけなくなりました。それどころか、通り過ぎた後に、その後ろ姿にペッと唾を吐くこともありました。それで5歳の子どもだった私も、あれ・・・、何か空気が変わったな、と気が付きはじめました。

それから、間もなく8月15日を迎えます。8月15日の日は覚えていますけれども、すごく暑い日でした。暑くて、暑くて、蝉が鳴いて、そういう天気でした。

その日、3メートルの塀の中で、日本人だけに「日本人だけ工場長の家へ集まりなさい」という回覧板が回されました。いつもだと朝鮮の人も、一緒に働いている人たちみんなで、会議か、それからいろいろと話があるはずなのに、日本人だけ集まれというのは何だろうねと言いながら、ふと気がついたら、いつの間にか工場の中は、ガラーンとして、韓国の人も中国の人も姿が見えませんでした。

私は近くの蝉がミン、ミン鳴いている木の下で、泥をこねて戦車をつくったり、飛行機みたいなものをつくって、ドカーン、ドカーンとやって遊んでいたのですけれども、12時ぐらいでしょうか、みんな、そろそろ集まって工場長の家へ入っていくのを見ました。

何だろうな、何の会議をやるのかと思ったら、何だかシーンとしていて・・・。しばらくしたら、バターンとはげしく戸が開いて、ダダダッと中から日本人の大

人たちが出てきました。

男の人や若い人はいません。工場に残っているのは、お年寄りか、ご婦人か、体の少し弱い人だけでしたけれども、そういう人たちがぞろぞろっとよろけるようにして出てきました。顔色はみんな青ざめていて、中には泣き崩れている人もいました。どうしたのだろうと思ったら、玉音放送を聞かされていたのです。

日本が負けた。

私は子どもだったにしても、鈍い子どもだったものだから、どこかで今、日本が戦争していることだとかを余り理解せず、ボーッとしていたのですけれども、一緒にいた「きょうちゃん」という自分より二つぐらい年上の男の子は、大人たちから「日本が負けた」と聞いて、「そんなはずない、そんなはずない」と、わなわな震えて悔しがっていました。

その日の晩、大変なことになりました。

中国には砂漠があって、その黄砂のせいでしょうか、夕方になると、夕日で空が真っ赤になるのです。

その真っ赤な夕日の中を爆竹が鳴り出したのです。パン、パン、パン、パン、パンと乾いた音が塀の外で。

何だろうと。その日は8月15日でしたが、8月にお祭りはないのです。冬とか秋とかはお祭りがありますがけれども、夏にお祭りないのにとあって、私は、外でぼんやりしていましたが、シルエットでしたけれども、今でも覚えています。

3メートルの高い塀の向こうにダーンと梯子がかかって、そこから真っ赤な夕空を背景にシルエットで、もくもく、もくもく、人がわき出てくるのです。中国人がこん棒を持ったり、石を持ったり、鍬や鎌を持っている人が、たくさん入ってきたのです。

よく見ると小鳥屋のおじさんもいたし、お菓子をくれたおじさんもいました。

私は「おじさん」と言って、そばへ駆け寄ろうとしましたが、お袋が家から飛び出して来て「てつや、そこで何しているの。家に入りなさいっ」と叫びました。

「知ってるおじさんが・・・」と言いかけたら、襟首をつかまれてバツと抱え込まれて、家の中に放り込まれました。

それと同時に、あっちもこっちも社宅のガラスが割られ、それから悲鳴が聞こえてきました。ガチャーン、バリーンという音、ドアを蹴やぶったり人を殴ったり突き飛ばしたりする音、それから泣き声です。

お袋は私に「てつや、弟たちを押し入れに入れなさいっ」と怒鳴って、私もやっと異変に気がつきました。その当時の私は6歳でしたが、すぐ下の4歳の弟と、それから2歳、あと、その年の末に産まれたばかりの何か月かの赤ん坊の3人を押し入れに押し込んで、布団をかけて隠しました。お袋はたんすや机、本棚なんかをドアに立てかけて、人が入ってこれないようにバリケードを築きました。

幸いなことにうちには誰も入ってこなかったもので、誰も危害を被らなかったのですけれども、後で考えたら、私の父親が同じ会社の中国や朝鮮の人たちを家に呼んで、一緒に家でご飯を食べたりして、誰とも仲が良かったこともあったのかな・・・と思います。ただ、周りでは、あっちこっちで悲鳴が聞こえたりしていて、それがしばらくの間ずっと続いていました。

言うのが遅れましたけれども、私の父親は、体が余り丈夫ではなかったもので、三十幾つまでは兵隊に捕られませんでした。兵役検査には、甲、乙、丙とあるのですけれども、本ばかり読んであまり体力がなく、体も弱かったので、大体、いつも丙種で兵隊失格でした。ですけれども、終戦の間際にはもう人が足りなかったのでしょう。最後は兵役検査で合格にさせられ、赤紙（日本軍の召集令状）が来しました。

同じ会社で働く経理をやっている50歳ぐらいのおじいさんまでが兵隊に捕られるぐらいだから、ずいぶん切迫していたのだと思います。

そういう男手も何もない中、あっちこっちで暴動が起きて、布団とかラジオとか金目のものは、みんな持って行かれてしまうのですけれども、そのほかにも日本人と見ると石をぶつけられたり、暴行を受けて大変な目に遭いました。

日本が負けた後、そういうことが毎日、毎晩繰り返されるようになってきたので、みんなで相談しました。ここにいつまでもいるわけにいかない、何とか日本へ帰りたい、日本へ帰りたいけれども、どうしたらいいだろうと。けれども、日本本土もどこも焼け野原で、アメリカ進駐軍の言いなりの無政府状態。情報が何も来ないので。ラジオを聞いていても、尋ね人みたいな放送はあるけれども、日本へ帰る、返すというような情報は何にもない。

そのうちに人づてに葫蘆島^{こるとう}という、大連の近くにある港や、釜山港^{ぶさんこう}まで行けば日本へ帰る船に乗れるらしいという噂話を聞きました。ただ、そこへ行くまでには、日本人のことを恨んでいる、怒っている中国や朝鮮の人たちがいる。

日本人の特に兵隊さんだとか警察だとか、権力のある人は少し威張っていたのでしょうね。それを恨みに思っ、暴動も随分あって、ひどいときには殺された人もたくさんいました。

それで我々も、ここにいたら危ないからということで、何としても逃げなくては行けないのですが、ばらばらに行くと危ないというので、日本人の社員の家族たち、おじいさん、おばあさんも一緒に、四、五十人の団体をつくって、まずはみんなで近くの警察署へ逃げ込みました。

二度とこの社宅には戻ってこれないだろうと、アルバムや貯金通帳、冬に向かうため、毛布や衣類をリュックにつめて、ありったけのお米を炊いておむすびを

つくってから、夜中の12時を合図に警察へ逃げ込みました。

ちょうどその少し前に、親父が帰ってきました。

シベリアへ送られかけたのですけれども、どうして帰ってきたかという、昔はトラックでも何でもあったのに、どこかへ移動するのに日本兵は歩かされたのです。

でも怪我したり体力のない兵士はどんどん、どんどん、落後していきます。そういうのは列から外されて、要は捨てられたのです。そこで朽ち果てた人もたくさん居たでしょう。

けれども、親父は何とか家族の元へ帰りたと思って、畑の中を這って、泥水をすすりながら痩せてボロボロになって帰ってきました。最初、帰ってきたときは誰だか分かりませんでした。弟たちはみんな、ヒゲだらけの真っ黒いお化けが出たと思って恐がって大泣きしました。

というようなことで、不幸中の幸いが重なり、家族が一緒になって、そこから必死に逃げることができたのです。

8月15日の終戦と同時に、中国では、毛沢東軍と蒋介石軍の内戦が始まっていました。日中戦争の前からやっていて、日本と戦っているということで一時やめていましたが、日本が負けた途端に、また内戦が始まりました。なので、我々日本人は、昼間は日本の工場や学校の校舎の中、講堂の隅だとか、廊下だとか、いろいろなところに隠れ、夜になってから、中国人たちが寝静まるのを待って移動していました。何としても葫蘆島へ行って、船に乗って日本へ帰りたいと。

父親は体が弱かったのですけれども、毛布やリュックを背負って、いつも3番目の弟を肩車していました。

皆さんご存じか分かりませんが、「キャプテン」という漫画を描いた、ちば

あきおというのが私の3番目の弟です。まだ2歳でした。

一番下は今、ペンネームを七三^{なみ}太朗^{たろう}とって、「風光る」とか、漫画のお話をつくっています。大学を卒業した後で、私やあきおの仕事を手伝っているうちにストーリーテラーとしての才能を発揮して、同じ業界の仕事をするようになったのですけれども、そういう一家です。

七三 太朗は、産まれたばかりで生後数か月ですから、お袋が抱っこして、逃げていたのですけれども、赤ん坊ですから夜寒かったり、おなかを空かしては泣くのです。そうすると「赤ん坊を泣かすなっ」と周りから叱られます。子どもを泣かすと中国人に見つかって、暴動に遭って何をされるかわからないと。中国人に見つかったら、荷物をみんな持って行かれてしまうからと。ですので、随分気をつけて大変な思いをしたと思います。

お袋は私に、もう二度と戻れないからと新品の革靴を履かせてくれたのですけれども、そういうときは履きなれている靴を履かせた方がいいですね。お正月におろそうというような靴を履かせてくれたのですけれども、それが少し不良品で、逃げている途中に右足のかかとから、釘が出てきたのです。

今でも思い出すと痛いです。びっこを引きながら、一生懸命ついていくのですが、「痛い」と言えないのです。ただ、一歩歩くたびに釘が刺さるからとにかく痛い。足を引きずりながら歩いていると、お袋から「てつや遅いね、置いていくよ。置いていったら、お前、もうここで、中国人の子どもになるんだよ」と言われ、私は「連れて行って」と一生懸命ついて行くのですけれども、とにかく痛い。そのうちちょっと明るいところへ出たら、父が私の靴から血が出ているのを見つけてくれました。「血が出ているじゃないか」と言われ、靴を脱がせ、親父が石を拾って、コン、コン、コン、コンとやって、出ている釘を潰してくれたの

です。それで履いてみると、痛くない。じゃあ行こうと思ったら、もう、誰もいない。団体で行動していたのに、我々一家だけがはぐれてしまいました。

夜中だったし、仲間たちを大声で呼ぶわけにもいかないし、どっちへ行ったのだろうと迷っているときに、道の向こうからクーリー帽といって、三角の傘みたいなものを頭からかぶった、明らかに中国人だなというのが分かるような、長い棒を持った男が近づいてきたのです。

「まずい、中国の人だ」と言って、路端の塀が壊れたところがあったので、家族みんなで、そこに入り込んで隠れたのです。

ずっと近づいてきて、見つかるかなと思ったらスーッと行ってくれたので、ああよかったと思っていたら、そうしたらその人が立ち止まって、戻ってきて、塀の中をのぞき込んできました。見つかったのです。

お袋はその男に「すみません、赤ん坊がいるのです。見逃してください」とお願いしました。

そうしたら、その人が「ちばさんじゃないの」と大声で叫んだのです。闇をすかしてよく見たら、父親の親友で、一緒に漢詩をつくったり、本を貸したり借りたりする同じ印刷会社の中国人だったのです。

その人に助けってもらって、しばらく屋根裏に匿ってもらいました。アンネの日記みたいですがけれども、あんなに広い屋根裏ではなくて、物置の上にある、野菜か何かを置いておくような狭い空間だったのですけれども、そこに2週間ぐらい匿ってもらったおかげで、我々一家6人は無事に帰ることができました。

そのとき、そこに何週間かいたのですけれども、弟たちが寒いし退屈で泣くのです。リュックの中にこっそり持ち込んだ紙があったので、その紙と鉛筆で、いろいろと絵をかいて、弟たちに紙芝居のように見せて、お話を聞かせたりしました。

弟たちから「次はどうなるの」、「その話は知っている」、「もうその話は聞いている」とかいろいろ言われました。私の知っているストーリーはすぐ尽きてしまいました。

だけれども、何とかしなくてはいけない。弟たちを静かにさせなくてはならないと、一生懸命ストーリーを考えて、ロバさんが逃げてどうのこうのという話を、ロバに羽根を生やして、それでロバを飛ばしたときには、弟たちがすごく喜びました。こうやって、みんなロバさんに乗って、日本に帰れたらいいね、という話になりましたけれども、お話作りや絵の工夫は苦労したなあ。でも、私が漫画家になる原点はあの屋根裏の部屋にあったのかなと今では確信しています。

あの真冬の中国で親父の親友だった中国人の助けがなかったら、我々は生きて帰れなかったし、今、中国と日本は政治的にちょっとぎくしゃくしていますけれども、庶民同士はとても仲がいい、お互いに助け合ってきたので、また中国ともまたうまくやれたらいいのになー、と思います。

何とも、取りとめのない話になってしまいましたけれども、時間になってしまったので、この続きは、また来週。

どうもありがとうございました。

(拍手)

以上